のを舉げたので、これから以下は VAN DER TOOP 以上記るした處のものは RYKS MUSEUN に屬するも Nicholas Hosselaer and his wife. (Frans Hals) Sandy road. (Jocob van Ruisdael.) Grey horse. (Philips Wouwerman) COLLECTIONの中に陳列せられてあるのである。 Flowers. (Jan van Huijsum)

Helena Fourment. (P. P. Rubens.

この繪は筆者の二度目の妻女の肖像である。

Old worman spinning. (Nicolaes Maes) Throwing dice. (David Teniers the younger)

The sportsman's booty. Cabriel Wetsu

The water-mill. (Meindert Hobbema

る處の有名なる畵と同一のものである。 此繪はロンドンの Wallace Collection に歳せられて居

Jewish Bride. (Rembrandt)

Drunken roiterers. (Jan Steen) Sick girl and physician. (Jan vnau Steen) 2216

Mill at Wyk neer Dunrstede. (Jan Ruisdael)

Winter-Scene. (Aert van der Neer.)

Cattle at pastter. (Paul Potter)

Peasants. (Adrian van Ostade) Vien of Dordrecht. (Jan van Coyen)

> Partrait of one of the van der Borchf family Landscape with cattle. (Paul Potter) Birthday-festival of the Prince of Orange. (Jan Steen)

(Anthonie van Dyck)

Calm. (Willem van de Telde the younger) Elisabeth Bas. (Rembrandt.)

た。 ら、晩餐後は一同勇を皷し、少雨を衝いて、市街見物を試み えた、旅館に歸つて後は最早外出の勇氣も失せたが、あまり 永く滞在をして居られぬ、往く先がまだく、数多あるのだか ン等も可なり多くあるが、これ等は省略することとした。 僅かに其一班を示したのである、尚此外にパステル書デッサ き書きをしたの許りでも、繪を見ねば何等の趣味もない、只 館内藏する處の畵帖は殆んど三千に近いから、其中此處に拔 Princess Maria Henrietta Stuart. (B. van der Helst.) 此日は殆んど終日館内を縱覽して居たので、餘程疲勞を覺

秋 興

汀

鷗

清

水

寺

にはスケッチブック一册もちしのみ、浴衣がけの無造作なるい 八月の末淡き霧かられる朝なり、K氏と共に清水寺へゆく、手

たり。 店番の男の額も清閑かなり。 あり、 陶もの賣る店、 がらにて塗られたる其色も、錆ありてスケッチによき處と覺え 物焼く家あり、高臺寺の崖下には、森の暗き中に小さき水溜り 西洋館あり。 門を左に、 かりし。 きに黄なる葉を散らせり。この境にふさはしからぬ、村井某の あり。花のころ、 でたちなり。新門前の通りを右に、細き露路を拔け、智恩院 IJ. 八坂の塔は程近く見ゆ、形よくこの町にも調和して嬉し 坂の中途より清水の塔見ゆ、暗き色ことによし。 青き蘆など茂りゐたり、閑靜にして心地よき處なりと思 産寧坂に曲らんとするあたり、 圓山の公園に入れり。祇園の大社に詣ずる若き女子 境内を離れて右にやゝ下り、左に細道をゆく、 軒を並べたり、朝早ければにや、ゆく人稀に、 あまたの人を集むる、たど一本の櫻は、風な 家のつくり面白く、 京焼の

ŋ 清水の御堂は、我が十五年前の寫生地なりき。 りに畵囊を展きしよ、そのころの有様思ひ出されてなつかし。 古き燈籠、 舞臺に上る、 無くもがなと思へり。 この塔も畵きたり、 そのやうなもの」み目に残れり、 いと靜かに心地清々しく覺ゆ。 本堂奥深く暗きあたり、 このあたりに三脚を裾へし、 佛前の香は、一 太き柱、大なる屋根 給葉書賣る店など この門も畵きた 縷の煙り あのあた

あたりの人家も見えず。此處に立ちて、かすかに通ふ香のかほ園あり、森あり、霧あれば遠き方は見えず、遠からぬ五條七條舞臺よりは、阿彌陀ケ峯程近く見ゆ、其麓は音羽の瀧なり、花

住みたしと思へり。りをきく、たとへがたなきよき心地なり、夢のやらなり、京に

興なりしよ。

「関なりしよ。

「関なりしよ。

「関なりしよ。

「関いたなる、今更ながら驚かれぬ。霧は雨となりてハラく、
は三分ののがあれり。寺内を出で、元の道を高臺寺に萩を見る、花は三分の
のの と面を撲つ、境内千年の老樹の下に、秋雨に逢ひしは得難き清した。
はいるに憩ひて、
は三分の
はのを撲がしま。

百草園

前に手洗所あり、 の塗替にて、コールタールの臭氣鼻を衝く。神の社は檜皮葺こでたり。杉木立晝なほ暗く、境内神さびたり。本社はいま屋根 依然、 の建設と覺し。 そ可けれ、 たり。同行者は新宿の田氏と一子正男となり。國分寺にて深 九月のはしめ、 を下り、乗合馬車にて府中にゆく、 ブリキのコールタール塗は神威を損ずるやらに思はる。 秋はさぞ可ならんと思ふ。馬車を捨てて大國魂神社に詣 銅にて葺きたるも悪しからず、瓦葺にても我慢すべ 風强く吹く日、多摩河畔の百草園といふにゆき 堂の造り方頭勝ちにて釣合よからず、 有名なる槻の並木は、 近き頃 舊態

やがて川近くに至る。田にも畑にも出水の跡著し、道の傍の榛じ、四丁切れたり、今度は三丁なりなどいふて喜ぶ。ば凉しく、眞晝の行路も苦しからず。正男頗りに小流に石を投社内を出で、西に多摩川堤に向ふ。烈日地を燒けど、風强けれ

舞ひたちて、 にありて、 迁 眞先に水に入る。 木は、 回して水を越せば、 風つよく吹き荒みて、 漸くにして河原に至れば、 地 徒渉せねば至りがたし、 より一丈の上に藁屑多くかられり、 眼も口も開きがたし、 更にまた 廣き 河原に白煙を立 一條の流あり、 水溜りありて行人絶えたり、 銘々靴を脱ぎズボンをかど 獨り喜ぶものは正男にて、 當時の慘狀思ふ て、 舟は其先の河原 細かき砂は

舟ある處迄歩む、大小の石は蹠を囓むで痛み甚し、舟に入り靴水は濁りて生溫し、徑十餘間、膝迄に至らず、岸に上りて其儘

百草園に至る。
沿岸何處も水害を蒙らぬはなし、ゆく事十餘町、少しく上りて始めて對岸に達す。渡船の料一人五錢、暴利惡むべし。再ひ河原を横ぎり、橋を渡り、更にまた舟にて流れを横ぎり、再

茶を携へて数十階、高處の四阿に休息す。當を開く、飯は黑く菜は無味に、やゝ飢たる腹にも甘からず、右の方に一茶店あり、就いて茶を請ひ、新宿にて求め來りし辨園は某氏の別莊にして、林泉の見るべきものあり、門を入つて

高地に空を限られ、多摩川原一文字に横はり、青田は前後を挾ゆく處、赭き崖あり、暗き森あり、廣き河原は細き水流を光ら一段の高所なり。東北西の三方を見るべし。東は多摩川の流れ一段の高所なり。東北西の三方を見るべし。東は多摩川の流れ百草園は、登路數丁の丘上にありて、我等の今居る處は、また

みて、 大績、 には雲の往來烈しく、 合し、 日野豐田あたりの 7 つくる。 時の移るを知らす。 變化ある眺めなり。 御嶽、 景致雄大なり。 岸近く枝振面白き松の並木あり。 H 氏正男、 雲取、 人家を見るべく、 木の質を拾ひて獨樂を作り、 仙 コバルトの色は、 遙かに見ゆるは立川の鐵 元、三峰、 こ」に寫生箱を開きて、 武 淺川ゆるく流れて多摩川 甲の諸山を背景とし、 廣く狭く、見え且隱れ 風やく静まりしも、 橋と覺 見取圖 或は蟬を捕 し。 西 は

日の傾くころ百草園を辭し、途々野菊をたづねて採集家を氣取り、高幡不動の前を過ぎ、淺川に架せし某橋を渡る、このあたり、高幡不動の前を過ぎ、淺川に架せし某橋を渡る、このあたしからず、五六枚の畵材は得らるべく、晩秋のころ再び訪はむしからず、五六枚の畵材は得らるべく、晩秋のころ再び訪はむしからず、五六枚の畵材は得らるべく、晩秋のころ再び訪はむり、高幡不動の前を過ぎ、淺川に架せし某橋を渡る、このあたしからず、五六枚の畵材は得らるべく、晩秋のころ再び訪はむしからず、五六枚の畵材は得らるべく、晩秋のころ再び訪はむ

り、どの室も客滿ちたり、 新宿に至つて、 る人怒つて罵り、 席を得しが、 日 さんとて、誤つて革鞄を墜し、 野停車場に至りつきしは夕暮なり、 乘る人のみ多くて混雜甚し、一客網棚より傘を下 客の殆と全部は車を下れり。 客は倉皇として走り去る。 辛ふじて室に入る、 下なる小兒の頭を傷 折よくも上り 悲劇あり 立川にて 列車 喜劇あり 僅 は 母な 來れ

H氏に別れて家に歸りしは夜の八時、晚餐の味極めて可なり。

* *

*